

として退社を共にしたのが井口先生だったとあったのである。そして、井口先生をして社会学の道に入らしめたのは如是閑であつたという。

(一九七三年八月八日稿)

井口孝親さんと令夫人のことども

新 明 正 道

井口さんは、こちらの社会学科の初代の主任教授であるが、私はそのお名前を、私が東大法学部在学中(大正七—一〇年)、当時一部の学生の間で読まれていた雑誌「大学評論」を通じてすでに知っていた。この雑誌は後に衆議院議員にもなった星島二郎氏を金主として発行されていたように記憶しているが、私が師事していた吉野作造先生もこれに応援して時々論文を書かれていたところから、先生とも若干縁のあった初期の新人会の会員になっていた私は、「大学評論」を買って読むと同時に、これの寄稿者の一人だった井口さんご自身また吉野先生の門を出ておられるというので、何とはなしに氏に特別な親近感をいだかされていた次第である。

ところで私は大正十年大学を卒業してすぐ、当時神戸にあった

関西学院で教鞭をとり、政治学とあわせて社会学の講義まで担当することになったが、大学で社会学について、研究する機会が全くなかった私は、社会学の講義の準備に全力を傾注する必要がある、さかんに社会学書を読みあさって、論文も主にこの領域を中心として発表しているうちに、何時の間にか世間から政治学よりも社会学を研究する人間とみなされるようになり、結局、昭和元年東北大学法文学部に社会学の講義が開設されるとともに、図らずもその担当者として招聘されることにもなった。

この間井口さんは、私よりも一足早く、九州大学に法文学部が出来るとすぐ、大正十四年に社会学の講義を担任され、間もなくドイツに留学されていたようで、私も時折論文をのせてもらっていた。長谷川万次郎さんの主宰する雑誌「我等」の誌上で、私は

井口さんがドイツから書き送られた論文や通信を時折解読していたが、東北大学へ移ってから三年目、今度は私自身がドイツに留学することになり、吉野先生のところへあいさつに伺がりと、さきからかねて研究のためドイツに行っていた井口さんが帰京してさいわい上京しておられるから、面分してアドバイスを受けたらよからうとのこと、早速私は、先生のゆみで井口さんの宿舎をたずねて初対面することになった。この時井口さんは、私がまずベルリンに行くときいて、ベルリンには家内を残して来たので、何か必要があつたら訪問するようにと、私に夫人の住所を書いて渡されたものである。

私がベルリンにいったのは、昭和四年四月の終りころ、下宿をベルリン西南部のウィルマースドルフのヘルムステット街に定めながら、地図を調べてみると、井口夫人のおられるところは、歩いて十分程のアジャップフェンブルグ街の一角にある。私は、フィアカント教授に会って大学での聴講許可の手続きなどをすましてから、早速夫人のお宅を訪問したが、夫人は、地階の小さなすまいのなかでお母さんと長女のマリオンちゃんと三人で暮らしておられ、その生活は決して華やかとはいえなかつたものの、知性的なスウィス生まれの夫人の家政的手腕によつて、室内はホドラーの絵画ながらきれいさっぱりと片付けられている。

マリオンちゃんは、四才くらいだったろうか。黒髪豊頬の愛くるしいお嬢さん。夫人の話だと、マリオンはいまバレーの学校に通っている。行く末は、才能があつたら芸術家としてその道に

進ませたいとのこと。夫人は、日本に帰京した井口さんに触れて、「井口は、日本へ一緒に帰つてはと勧めたが、家族制度の全くちがった日本に行つて住む決心がつかないので、思い切つてこちらにとどまることにした」と語り、一瞬淋しそうな表情を見せたが、すぐもとの引きしまった顔にかえり、そこに御健気な主婦としての微笑さえ浮かんでいたようである。

この時は、私自身ベルリンに着いてから一カ月にもみならず、ベルリンの東西もわからない赤毛布的な存在だったが、夫人は、この私をあわれんでか、一日私を誘つて近郊のワンゼー湖畔の桜の花見につれて行つてくれた。桜といつても実のなる桜で、花の色も白く、遠くからみた景観では、むしろ日本のすももの花の咲いた感じである。湖畔には白ペンキぬりのカフェヤレストランが散在し、歩き疲れた人々が微笑しながら休んでいた。私は夫人に案内されるままその一っに入つて昼食をとつたが、食後夫人は私にラウヘンするのをどう思ふかという風に話しかけた。ドイツ語の発音になれていない私は、ラウヘンを^元Lにはじまるラウヘン（歩く）と受けとつて、特別ラウヘンする興味はないといったようなあいまいな返事をしたが、夫人は、シガレットのケースをとり出して、ラウヘンは^元Rにはじまるラウヘンであり、夫人の発言の意味がつまり、畑草をのんでもよいかというにまつたことを明らかにされた。私は思わず破顔一笑したが、かえりみると、これは私のドイツに入国してから最初のドイツ語の失敗になるわけであ

る。

そのうちにやがてベルリンにも比較的涼しい夏がやって来たが、偶然私にとって外遊最初の思いがけない危機が到来した。というのは、そのころ極東の満洲の中華民国とソ連との間で国境附近で局地的ながら戦闘が発生してシベリアは不通となり、シベリア經由で送られて来る留学費が何時入手出来るか予測がつかなくなつた。大使館に一、二の知人はいたものの、私には留学早々借金を申しこむほどの度胸はない。金が手に入るまでどう食いつづけてゆこうかと苦悶している最中に、私は夫人の訪問を受けた。夫人も日本からの送金がおくれていたので、心細くなつて私のもとに子細を聞きに来られたのである。夫人の場合お母さんとマリオンちゃんをかかえておられただけ、私より心配の度合はずつと強かつたにちがいない。私にもつと先見の明があり、手許に余裕があつたら、立て替えてあげたかつたが、私自身火の車に近い状態だったので、言葉だけで夫人を慰めるよりほかなかつたのは、思い出すだけに汗顔のいたりである。

夏が終つてから、私はベルリンから南下してドレスデン、エルフルト、ワイマールを経てインスブルック、フランクフルトを巡り、さらに北上ケルンに行つてそこで一カ月余滞在、この間フォン・ウィーゼ教授にも接触し、そのゼミナールを參觀したりして、さらに北上ハンブルグ經由キールに行つて二泊、テンニェス教授に二回面会してベルリンに帰着したのは、そろそろリンデンの落

葉が風に吹かれてカサコソ舗道の上を、ころがってゆく年末に近い頃であつた。私はクリスマス会の会食に呼ばれて久しぶりに井口夫人のおすまいを訪れたが、夫人、マリオンちゃん、お母さんのほかに客は日本人の私ひとり。この時分になると、私もかなりドイッになれて来て、杉本栄一君その他日本からの留学生にも何人かの知り合いが出来たが、これまた、見方によれば一匹狼である。それだけ私は、夫人やマリオンちゃんのなかにあつて、エトランジェとしてむしろ旅愁を忘れる思いをさせられたものだが、後で考えると、お客が私ひとりとは、井口夫人にしても多少は淋しかつたのではなからうか。井口さんとは面識があり、しかも専攻も同一の私が、ドイッに赴いて井口夫人の近くにいなながら、夫人の孤独をお察しすることも出来ず、一介の外來の客として満然とお付き合ひするに終つた観があり、苦を今にかえず由もないが、人生経験の浅薄であつた当時の私がかくやまれてならないものがある。私はその翌年には大学での聴講にもピリオドを打つて、夏にはオーストリアへ遊び、秋にはマンハイム教授のいるフランクフルト大学へ移り、年末から次の年にかけてはフランスのパリにあつて、クリスマスにはサツマ会館に泊つていた日本人の留学生と一しよに、にぎやかにサクレ・クール寺院におまじした。私はパリにはその後三月の終りころまでいて、昭和六年四月イタリーのローマその他の名所をまわつてナポリから、日本郵船の香取丸にのつて帰京の途についている。したがって井口夫人とは、その前

の年のはじめころ、ベルリンでおわかれしたのが最後となっているが、そのころすでにドイツでは、ナチスの勢力が抬頭して来ており、三年後には周知のとおり、ついにヒトラーが政権を獲得するにいたったものである。手紙不精の私は帰京後ついに夫人やマリオンちゃんとも消息不通になってしまったが、ナチスの支配

下、ひいては第二次大戦下のドイツで夫人やマリオンちゃんはどうされたであろうか。マリオンちゃんもいま健在ならば、五十才近くの年輩であつて、「ちゃん」づけで呼ぶのはどうかと思うが、私の脳裡にあるマリオンちゃんのイメージは依然として四十余年以前ベルリンで見た時のそれである。

組織連関の理論

はじめに

組織研究においては、これまで、組織内部構造の分析とその性格の解明に主要な関心が払われてきた。官僚制の構造要件の検討。形式理論で説明してきた合理的作業過程。人間関係論が注目したインフォーマルは側面のダイナミクスなどはすべて組織内部の集団構造をめぐる諸変数の研究であつた。

この内部構造研究の主要な目的の一つは、どの様な管理機構、つまり組織構造をとるとき、組織の目標達成の効率を最大にすることが出来るのかという課題の解決であつた。(注1)

しかし、この課題の解決への努力は、完全な解決へ近づこうと

考えるならば、組織内部構造をめぐる変数だけではなしに、組織と社会内の諸集団との相互作用の側面を研究の視野にとりこまなければならぬということを示した。

例えば、経営組織の利益追求において、短期的、場あたりのな展望の下に、がむしゃらな操業、雑な製品検査で利益をあげ得たとしても、それが廃棄物の不完全処理による公害、有毒物質を含む有した食料品の販売による食品公害などをひきおこして、社会から反発をまねき、ブランドの信用を落す様では、長期的には大きな損失をしたことになる。

佐々木 武 夫